



魔羅羅王像 この王は美出尾のシンボル像で、5つの目を持った美出尾王である。そして、この王は琵琶を奏する音像一体の王で、密教界における映像の王である。以後おみしりおきを

# 中島興の ビデオソフト学入門 ⑦

## ●木的撮影法実践篇

「木・火・土・金・水」という五元素が、宇宙を構成するという「五行説」によって、宇宙や人間を考え、そして「ビデオソフトづくり」の方法論を探る「ビデオソフト学入門」。ここ数回にわたり、「木的撮影法」について考察しているが、それは「木」

なる存在、「木」的思考法が、この「五行説」の基礎にあたるからである。

その「木的撮影法」の実践法について、今回は少し趣を変え、4人の若いアーティストによって実践された、ビデオ作品づくりによって考えてみたい。



### キナリオ(木成法)実践術①

## まず、点から線をつくること

前号でも述べたが、木的人間がビデオ作品を作る時の心構えとして、大切なのは、"ものを立体的"にとらえるということである。では、どのようにしたら、その木の世界を形づくる立体主義(立体曼陀羅)によって、ビデオ作品が作れるようになるのだろうか。

立体主義というのは、これまで書いてきたように、点(種)から線(幹・枝)へ、線から面(葉)へ、そして体(実)へ、といった植物のなかにある共通の成長パターン、構造、構築性を指すものである。木的人間はその成長パターンを自己のビデオ作品づくりのなかに生かし、そのような思考(成長)パターンで、宇宙を立体的にとらえなおすことが大切である。それがこのキナリオ法(木成法)における、ビデオの木的構築法のキーポイントなのである。

それではここで、ビデオを初めて体験し、このキナリオ法にもとづき、ビデオ作品づくりに挑戦した4人の若いアーティストを紹介する。

窪田誠君、菊地正君、辯田実君、森本泰行君である。彼らは、点と点を結ぶ線を作り出すために、ビデオカメラとデッキを持って、街に飛び出していった。人間がカメラを持つ

て、ひとりで街を歩き回ることは、点的行動といえ、それはまだ「線」を形づくるにはほど遠いものである。「線」にするために、ビデオを媒介役にして、他人とコミュニケーションし、そこから「線」を発見する、その接点を探すわけである。そこで、この4人はそれぞれにビデオをたずさえ、「線づくり」に出かけたのである。

最初の日は、まったく他人とコミュニケーションができない、一日を棒にふってしまい、クタクタになって帰ってきた。次の日、彼らはビデオだけではコミュニケーションできないことに気づき、バスケットボールをつきながら、ビデオを片手に街へ出た。バスケットボールが、他人とコミュニケーションを円滑にする道具になる、と思ったからである。つまり、ボールを自分でつき、そのボールを他人につかせることにより、コミュニケーション(リレーション)、「線づくり」を実践しようとしたのである。確かに、ボールをつなながら他人に話しかけ、そして、そのボールを他人にわたすことは、ひとつの「線づくり」である。が、この日も、彼らはこれといった線の発見をなしえずに帰ってきた。彼らは、次

の日から少しずつ、このキナリオ法に疑問を持ち始めた。それは当然、ビデオ作品づくりの最初につきあたる第一の関門だったわけである。しかし、ビデオソフトづくりに当たって、その行動に疑問と矛盾を感じ、精神と肉体がアンバランスになった時は、ひとつの「発見」を導き出すターニング・ポイントにさしかかった時なのである。

彼らは次の日、ビデオで撮るということをまったく意識せず、ただ、街をブラブラとビデオを持って歩いた。つまり、カッコ良く撮ることを放棄し、自分の生身の感覚で、自分好みの女性にアタックすることが、キナリオ法における「線の発見」に一番、大切なことだと思うようになったのである。

そして、いよいよこの4人の男の視線を一齊に集め、満足させる女性の出現があったのである。では、その女性に出会った時の様子を窪田君にレポートしてもらおう。

「僕は、無理してビデオで撮るよりも、いい女はないかと自分の肉眼で探していく方が、よほど人間的ではないかと思った。第一、ビデオのファインダーをのぞいて、あれこれ自分好みの女の子を探すより、自

自分の体でぶつかっていった方が、女の子はひっかかってくるもんだ！ビデオを撮るということを意識すると、なんか撮れないんだ。やはり、最初はコミュニケーションが必要なので、ぶつかるしかなかった。とにかく話しかけて、話に応じる女の子なら誰でもいいと思った。あとは自分のキャラクターしかないもんね。彼女が眼に止まったのは、やはり、自転車と赤いズボンが印象的だったからです。

では、次にこのビデオ作品づくりの「点」から「線」への契機となった女性、和久みゆきさんに彼らとの出会いについて話してもらいましょう。

「私はその日は原宿に出かけるので、若づくりをして出たんです。少々、オバジですから、カッコ良くキメて、出かけようと思ったのは事実です。原宿の表通りはファッショナブルでしょう。いつもなら裏道を通るのでですが、その日は表通りに面した、あ

る会社に仕事に行くので、若づくりをして出かけたわけです。街に出て歩きだすと、『たよりない』男の子達がなにか撮影しているという様子でしたが、別段、気にもしませんでした。それでも、あまりに『たよりなさそう』だったので、少しからかってやろうかと思ったんですね。赤い自転車に、赤いパンツが、彼らとの出会い、コミュニケーションのきっかけとなったのだとすれば、赤でキメタということが、それだけ彼らの眼をひきつけたんでしょうね！」

と、いうわけで、この4人の若いアーチストは、やっとの思いで、このみゆきさんという「点」と出会い、それから6ヶ月もかけて「線づくり」を開始したのである。本来なら、その彼らのビデオテープを見ながら、「点から線へ」というキナリオ法を考えしていくのだが（ここが本という活字表現の限界!!）、まずは「点」から「線」を発見するプロセスについて、彼らを交えてディスカッションする

ことにした。

みゆきさんは、まったくビデオを知らない女性である。しかし、彼女と出会ってからの半年間、この4人のアーチストは、彼女を撮り続けたわけである。そして、ついにこの撮る側と撮られる側の関係は、ひとつの大線に発展した。彼女は撮影された自分のビデオ映像を見せられることにより、その精神に変化が現れ始めたのである。しかし、それにもまして、撮る側である彼らの精神も、おおいに変化していったのである。この両面の変化が「点から線、線から面へ……」へといふ立体的な軌跡の入口なのである。これから先、どのような映像に組み立てていくか。これはまた初めに戻って、植物の成長プロセスをもう一度、良く観察し（「本的撮法」を考え）、そこからヒントを得ることである。

## キナリオ(木成法)実践術②

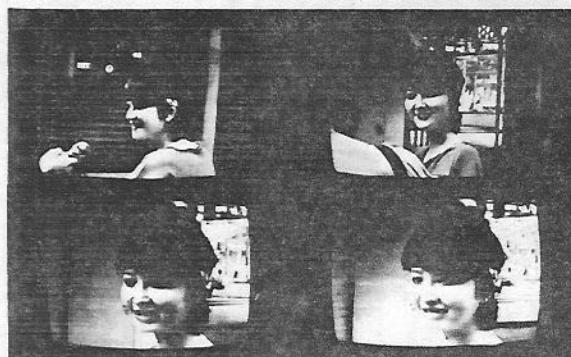


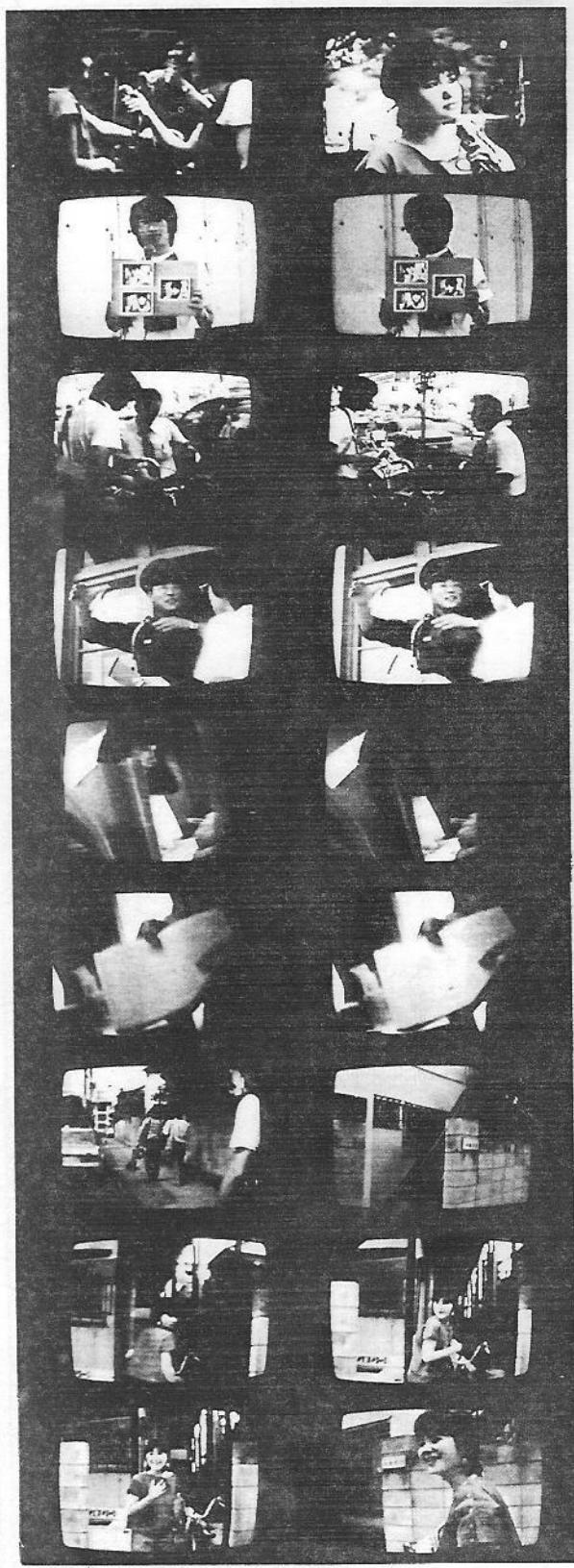
# 魅力ある個性と出会って、 ビデオは成長する

窪田 誠  
森本 泰行  
菊地 正

和久みゆき  
編集部V.C.

### 街頭インタビュー「みゆき」





▲左頁の写真が街頭インタビューによる作品『みゆき』。ビデオを持って、原宿でインタビューした女性を探し歩き、そして半年間にわたり撮り続けた作品。ビデオによって出会った彼ら。その出会いについてコメントしてもらおう。「和久みゆきさんには、最初に出会った日、私たちは特にこれといって目的があったわけではなかった。とにかくビデオを持って街にくりだせば、なにか面白いことに出くわすのではないかと期待していただけであった。ビデオで、他人とコミュニケーションするには、実に楽しい。その日は場所が原宿であったため、女性の存在が気になりだし、即、遊び心を持ってのインタビューとあ

いなった。4~5人の女性に、私は話しかけたのだが、どうも反応がにぶい。エーイ、ここは原宿だぞと思いつながらも、さらに街をぶらついていると、赤い自転車に赤いパンツ、そのうえ赤いバンダナに赤い口紅を塗った女性が、ペダルをふみふみやってくるではないか。その時の彼女は、実によく街に溶け込んでいた。インタビュアーを交代していた私は、とっさに「あの子、行け!」と菊地に声をかけた。ところが、菊地のインタビューがどうもいけない。リズムが合わないのか、彼女にのまれていると感じた私も、そのインタビューに加わったのだが……。

## ぶつけ本番。コンセプトなしの街頭インタビュー

中島 ふつう映画やビデオを撮る時は、ストーリーやシナリオを作ってから始めるでしょう。しかし、この街頭インタビューを始める前には、制作者にそういうものがなにもなかった。じゃ、これから撮りに行こうかと決めて、それから偶然、和久みゆきさんという女性に出会ったわけです。逆にいえば、ビデオがなかったら、和久さんとは出会わなかつたわけです。

和久 そうですね。

中島 そして、そのビデオでのインタビューは、原宿での1回だけに終わらず、結局、それから半年間も和久さんを撮り続けるということになったわけです。しかし、これからこの作品がどう発展し、また、どう発展させれば良いのか、ということも制作者側にはまだ、わからない部分があるわけです。しかし、和久さんと知り合い、和久さんを撮っていくことによって、これを制作した窪田君達には、少しずつビデオがわかってきた部分もある。この作品でやったように、一度撮った映像を、撮られた人に見せるというフィードバックによって、木が枝分かれするように、ひとつのシチュエーションから、次の新しいシチュエーションが生まれてくることもある。ここにビデオの面白さがあるんだな。自分の撮ってきた映像から何かを発見し、新しいものが生まれてくる。そして、それを自分の方法としてとり入れ、作品づくりに生かす。それは8ミリなどでは考えられなかつた方法で、それがビデオの持つている面白さ、特性だらうと思う。

では、ここでこのテープを撮ってきた人に、ここまで経過について、まず、話してもらいましょう。

窪田 彼女に出会う前に、僕らは原

宿でビデオを持って、5人ぐらいの女の子に話しかけ、インタビューしたわけですが、ビデオに僕らがまだ慣れていないということもあって、リアクションがもうひとつ物足りなかつた。ところが和久さんの場合、ストレートに答えが返ってきて、話がポンポンはずんでいった。そこにビデオがなくとも、話ができるくらいでしたね。

中島 街でこういうふうに突然、インタビューされてもポンポンと答えられる。これは和久さん、あなたの性格からくるものなんですか?

和久 どうなんでしょうね。人見知りしない性格なんですね。でも、あの時、彼らがあまりにたよりなく見えたんですね。もし、彼がプロのような感じだったら、逆にこちらが動じてしまつたでしょうね。

中島 彼らはモタモタしていた?

和久 そう、モタモタしていたんです。何を質問しようかというプランも、全然、ないみたいで……。なんというかしら、彼らがあまりにたよりなげだったから、逆にこちらがいじめてやろうかという意識が、起きたんでしょうね。もし、彼らが本物のテレビインタビューアーかなんかだったら、「あら、なんでしょうね」「あら、いやだ」とかいって、カマトぶつて逃げたかもしれませんね。

V.C. でも、結局その場で1時間もインタビューを受けている。ちょうどその時、和久さんがひまだつた、と、いうこともあったのではないんですか?

和久 そう、あの時間はちょうど空いていたんです。忙がしかったら、インタビューには応じなかつたかもしれませんね。

中島 たまたま偶然がよく作用したんだな。双方とも、何秒かずれてい

たら、お互いに出会つていなかつた。モタモタしていたというけど……?

窪田 質問することも全然、用意していないなかつたから……。でも、彼女の場合、返ってくる答えに発展性があり、すごくやりやすかった。

中島 君はどう?

森本 こういう試みって初めてですかね……。菊地なんか最初、何を言っているのか、質問の意味もわからないようなことをきいています。まず、たよりなかつたですね。

中島 この時、撮った画を見ても、たよりない映像だよな。

窪田 カメラの視点が定まっていないんですね。

中島 でも、そこが4人の心理的な状況をよく表現していくいいんだよな。

窪田 ビデオだと、開りがなんでも映りこんじゅうでしまう。だから、どういう状況でインタビューしているか、画を見るとよくわかりますね。

中島 しかし、インタビューする彼らは欲求不満のかたまりのような人がほとんどだから、ビデオを見ても、わりあいズケズケ立入って、質問しているでしょう。それに対して、和久さんはストレートに、かつ大人っぽく受け答えしているよね。これはやっぱり、彼らをからかってやろうという意識があつたせいかもしれないね。でも、あの時は和久さんがビデオを持っていた方が、良かったかもしれないね。

和久 そうですね。私だったら、こうやろうというのがあります。でも、とにかく撮っている最中は楽しかつたですよ。というのは、私がこう言つたら、この人達はなんて返してくれるのかしらと……。

窪田 そういうの、考えてた?

和久 うん、考えてた。

## あがって、ブルブルふるえていたインタビュー

中島 菊地君はこういうのに参加していく、どういった感想を持った？  
菊地 ……。

中島 ビデオっていうのは参加するメディアで、積極的に参加し、コンセプトを煮つめていく、そこから作りたいというイメージが出てくるメディアだと思うわけ。そういうことを認識していないと、ビデオって参加していても、ちっとも面白くないと思うけど……。

菊地 この時はもう、あがってて…。  
中島 でも、こういふうにひとつものができるあがったけど、そこから何か感じたことは？

菊地 感じることはあります。

中島 それで、原宿でのインタビューに参加していく、どう思った？  
ふるえていたわけ？

菊地 そうなんです(笑)。初めはすごい人がいるなと思って……。なんて答えるか、彼女の答えが楽しみだった。

中島 君は人見知りする方？

菊地 ええ、する方です。

森本 でも、あまり変なことはきけないなと思っていたら、窪田がどんどん、きいていっちゃうし……。

中島 こういう時はやっぱり、どんどんひっぱっていく人がいないと、うまくいかないんだな。内気な人ばかり集まっているとだめ。でも、たいてい内気な人がビデオを好きなんだよね。

窪田 インタビューっていうのは、街頭でのひとつのイベントだから、イベントを起こしていこうという気がないとね。あまりに消極的だと、作れるものも作れなくなるという気がしますね。

和久 私の前に、何人もことわられたというのは、インタビュー側が、あまりに素人っぽかったからではないんですか？ もし、プロであれば、なにかしら話を引きだしていたと思うんですね。

中島 でもプロだったら、きくこともあらかじめきめておいて、パッと

撮るでしょう。だから、ひとりの人間に1時間もインタビューなんていだらうね。

和久 そうですね。でも、あの時は最初は撮っているんだなと思っていたんですが、そのうち本当にビデオを回しているんだろうか？ と、いう気持ちもきましたね。というのは、窪田君がインタビューしている時に、他の人が「テープ、終わっているみたい」とか「回っているのか」と、横で言っているんですね。

だから、途中からこれはインタビューでもなんでもなくなって、ただのふつうの“しゃべり”なんだな、と、思って……。でも、あとで見たら、全部入っているんですね……。

中島 びっくりした？

和久 びっくりですね。でも、本当に面白いなと思いましたね。

V.C. 撮った画を彼女に見せて、その様子をさらに撮影するというのはあとから考えたわけですか？

窪田 この作品にはコンセプトが最

### 街頭インタビュー『みゆき』 キナリオ法的生成パターン(フローチャート)

点(種)的存在



菊地 正D



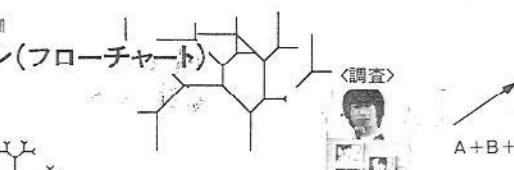
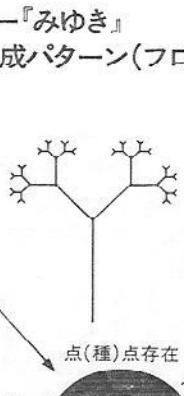
中島 泰行C



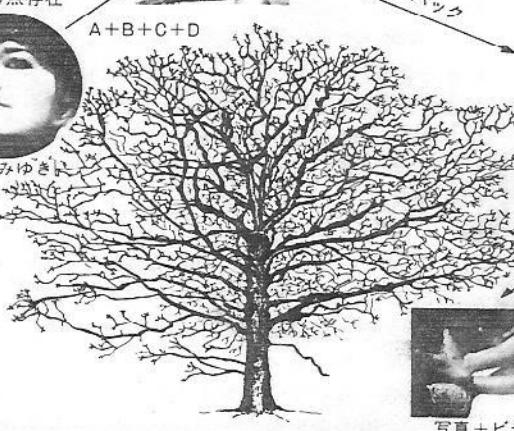
窪田 誠A



菊地 正B



A+B+C+D



〈彼女の家〉



A+B+C



〈彼女の部屋(1)〉



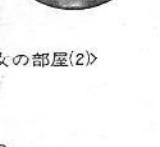
〈彼女の部屋(2)〉



写真+ビデオ



パフォーマンス



初からないから、彼女をインタビューしても、このあと、どういうふうに作っていくかということは全然、決まっていなかったんですね。また、みんなで話し合っても、これといっ

たプランはなにも出てこなかった。彼女を交じえて、話し合おうという案もあったけど、それもうやむやになってしまった。じゃ、個人的に彼女にアプローチしたら、その人のバ

ーソナリティーで違った面が出てくるのではないだろうかという案が出て、僕と榎田君と森本君で、彼女の家に行って、原宿でのテープを見せようということになったわけです。

## 彼女の家を訪ねたくても手がかりなし。残されたのは1時間のビデオテープ

森本 でも、彼女の家を探すのが面白かったね。

中島 インタビューであがって、夢中で撮っていたから、彼女の住所もなにもきいていない。

榎田 そう、彼女の家をつきとめる手がかりが、なにもないわけです。だから、原宿でインタビューしたテープを最初から全部、見なおして手がかりを探していくんですね。

森本 まず、彼女が花を買うと言っていたので、写真を持って表参道の花屋さんに行って（彼女が表参道あたりに住んでいるというのはきいていた）、自転車を買ったというから、自転車屋に行って、その頃、ドロボウに入られたと言っていたから、交番に行って……。彼女の名前はきいていたから、電話帳でも探したけど、

のっていない……。

中島 名前はテープのなかで、ちらっと言っているんだよな。

榎田 そう、そこがビデオの面白いところですね。写真だと映像だけしか残らないけど、ビデオには音も入っているから、あとで再生してみると、そこから資料、あるいはヒントを得ることができる。

中島 それでもわからなくて、このプランはもう、ほとんど破算だったわけ。すると、上智大学卒業だと言っていますよと、榎田君がいうので、じゃ、大学へ行って調べてみたら、とアドバイスしたわけです。

榎田 ところが、大学の学生課では事情を話しても、まったく教えてくれなかった。そこで僕らは上智の在校生だということにして、ある「会」へ行った。そこで、住所、電話番号などがわかったんです。

V.C. それで、その探した期間というのは、何日ぐらいなんですか？

榎田 2週間にわたって、正味2日。

V.C. じゃ、非常にラッキーだったわけですね。

中島 だから、彼女にしてみれば、自分の出た大学名をもらしたということは重要なミスだったわけだ。

V.C. それで彼女の家へ、突然、訪ねていった？

榎田 そう。電話番号はわかっていたけど、前もって電話してしまったら、驚きがなくなるから、突然、行ったわけです。すると、まるで打ち合わせしてあったかのように、彼女がひょっこり、アパートから出てきたわけです。

中島 だいたい、この話は全部できすぎているんだな。でも、ドラマというのは案外、そういうものかもしれないね。

森本 あの赤い自転車を押して、ポット出てきてね。

窪田 あの時はびっくりした？

和久 びっくりですよ。だって、これから出かけようと思って、表へ出たら、彼らがいるんですもの。

中島 映画一本見るより、感激したでしょう。

和久 うん、すごい感激。

中島 でも、映画ならアパートの彼女の部屋の前まで、カメラが写していって、というように、徐々に盛りあげていくんだけどね。

窪田 そう、突然、出てくるもんだから、こっちも言葉を用意していかなかったわけです。

和久 お互い、あっけらかんとしてね。

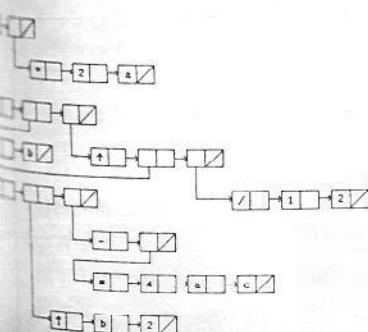
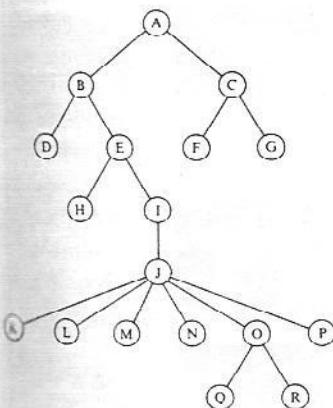
中島 こういう場合は、撮る側より撮られる側の方が、感激が大きいんだよね。

和久 強いですね。

中島 これは大事なことなんだよね。

窪田 摄る側というのとは、撮りに行くんだという目的意識がありますからね。

中島 でき上がりしているんだな。だから、感激の大きい撮られる側の方が、撮る側のコンセプトを全部、吸いとってしまう。たとえば、和久さんを撮った画を見ても、撮る側のショエーションより、和久さんのキャラクターの方が強くて、どんどん撮る側を引きつけていっている。そこでは、撮る側のコンセプトもなくなってしまう。そこがビデオの面白いところなんだね。キャラクターの面白さと出会って、それに吸いこまれていって、そこから何かを引き出していく。そこが、今までの映画などにはなかった、映像づくりの面白さなんだな。映画だったら、たとえばカッコ良く出てこいとか、打ち合わせをしておくでしょう。こういったビデオの特性、面白さをひとつひとつ体験していかないと、ビデオは



ちっとも面白くならない。ただの映像に終わってしまう。

森本 シナリオのないドラマというか、何が起こるかわからないといった面白さ。これはビデオでないと、体験できないでしょうね。

V.C. でも、原宿での1時間というのは、ひまだったからかもしれないけど、その後も彼らのビデオ撮影に応じていくというのは、和久さんの性格によるところが大きいんですね。ふつうなら、もう、うるさい

というふうにことわるでしょう。

中島 うるさいと思わないからね。めずらしい性格だね。だいたい、あなたは何をしてる人？

和久 通訳をやっています。ちょうど去年の1月頃、フリーになったんです。

中島 じゃ、インタビューした6月頃は、まだ、あなたの気持ちも不安定だった？

和久 そうです。やっと、ひとりになって、あちこち回っていた時がか

ら、これからやっていくかなと、ちょっと不安な時期でしたね。

中島 そこへ彼らがひっかかってきたので、ちょっとかみついてやろうと……？

和久 うん、それはあるでしょうね。

中島 今、インタビューしたらどうだろう？

和久 うーん。どうでしょうね。あの時は、いろいろなシチュエーションがかみ合ったから……。

## ビデオはヘタくその方がいい？

中島 初めてテープを見せてもらつた時は、どう感じました？

和久 私って、こんなふうにしゃべるのかと、まず、それですね。

中島 でも、テープを見ている時の、あなたの様子を撮ったビデオを見ると、ゲラゲラ笑っているじゃないですか？

和久 笑ったなんてもんじゃないですよ。もう、いいようがありません。もし、このテープが私のものになるんだったら、今後、これをずっと残しておいて、さらに毎年、同じような時期に自分を撮っていったら面白いなあ、と、思いますね。私ぐらいの女の入って、すごく変わっていくでしょう。

中島 撮って、見せた側としてはどうなんだろう？

窪田 一般的には、ビデオに自分が映っているのを見るという機会はありませんから、撮られた自分を見るというのは、面白いでしょうね。彼女は、自分の画を見て、自分のことを指して“この人”とよく言っていたけど、そういうふうに自分を客観視してしまうことや、テレビのなかの自分が笑えば、見ている自分も同じように笑ってしまうという体感、これは面白かったですね。

中島 このテープから感じられる、彼女の心理的変化が面白いんだけど、彼女の撮られている時の意識というのは、どうだったんですか？

和久 撮られている時は、あまりよくわからなかったけど、今にして思えば、彼らがここまで私を迫ってき

たという感激が、まず大きかったんですね。その後は、せっかく私を撮ってくれるのだから、うまく撮ってほしい、と、思い始めたんですね。

窪田 そういえば、そういうこと言ってたね。

中島 彼女のうまく撮ってほしいという気持ちは、君達にとって大事なことだと思うんだ。

窪田 そうですね。でも、たとえば、映画ではいい画面ばかりのつなぎ合わせでしょう。僕らにもうよく撮りたいという気持ちはあるんだけど、それよりもビデオの長回しの良さを生かして、いい面と悪い面の両方、ポロッと本音を出した時の画をつないでいきたいと思うんです。ですから、ビデオで一皮むいちゃえ、という……。

和久 正直に言えば、撮ってもらっている時に、この人達、本当にうまく撮っているのかしら、という気持ちは私にはあったんですね。というのは、彼らには撮っている時に、プロ意識があまりないんですね。もし、プロフェッショナルな人に撮られているとしたら、こちらもそれなりにまえてしまうんだけど、彼らの場合にはそれが希薄だから、私の方も適当にしゃべっていればいい、みたいな気持になるんですね。

中島 プロ意識って、こういう場合、あった方がいいのかね。

和久 私は女を撮る場合には、あつた方がいいと思います。たとえば、スチールの場合、相手がすごいカメラマンだとしたら、きっとうまく撮

ってくれるに違いないと信じて、いわれた通りにしますよ。ところが、相手にそういうものが感じられない、逆に私がやってあげなければと思っちゃうんですね。もし、デビット・ハミルトンに撮ってもらうとなったら、こっちもがんばっちゃいますね。いわれた通りにしますね。「こうしなさい」といわれたら、「ハイ」。「そうじゃない」といわれたら、「ああ、どうやるのかな」とかね……。

森本 でも、写真のモデルって表面だけでしょう。彼女の今、言ったことも写真の場合だけだと思うんですね。彼女のキャラクターも、ビデオで、こういった方法で撮ったから、映像に出てきたと思うんですね。

窪田 僕も、彼女が僕らに対して、プロじゃないというふうに思っていたから、この面白さが生まれてきたと思うんですね。僕らはプロじゃないから、かまえる必要がない。そこから、彼女の個性が自然に出てきたと思うんですね。

和久 そう。ポーズをとる必要がないから……。

中島 その、モタモタしている、アマチュアっぽいところが良かったんだろうね。それがお互いの出会いを促進させたわけだし……。すると、ビデオはヘタくその方がいいということになるのかね。

窪田 この作品の場合、対象への依存度が非常に大きかったですからね。僕らがモタモタしているところは画面から見えるけど、それでも確固たる相手がいるから、それが気になら

ない。だから、撮る側よりも彼女の持つパーソナリティの方が大きいわけです。

中島 僕はこのテープを見ると、和久さんが撮る側を完全にくっている、この映像は80%以上、和久さんの魅力だと思いますね。

ひょっとしたら、パーソナリティの強い人間がビデオを持って撮ったら、いいものはできないかもしれないね。ビデオは才能のない、パーソナリティーのない人間が持った方がいい、ということになるかもしれないね。

和久 どうなんでしょうね。

中島 それはあるかもしれないよ。初めてビデオを持って、ブルブルふるえていた方が、「ああ、かわいそうね。この人」と同情されて、面白いキャラクターに会って、いい作品ができるかもしれない。

森本 それは彼女がたまたまそうだったからで……。

中島 でも、ここでは彼女しか、ひっかからなかったから、それしかいえない。他に比較するサンプルがないから。

窪田 でも、僕らのビデオへの最初の入り方として、今回の経験は良か

ったと思います。今度また、違う人をインタビューしたら、また違ったものができます。相手が異性だと、作品以前に僕らの興味がその映像に出てくる。だから、逆にあまり作品ということを意識しないで、作ることができた。

中島 ビデオの場合、映画のようにたくさんのお客さんを感激させるという目的で作るのではなく、たとえば和久さん、ひとりが感激するものであってもいいと思う。だから、もし、これを他の人が見たら感激しないかもしれない。

窪田 いや、僕はこれを何人かの人見せましたが、みんな結構、喜んで見ていましたよ。

中島 そう。でも、後半の方ではカメラもうまくなっているし、彼女もきれいに撮れている。このテープには、彼女と作る側、両方の変化が現れているから面白いね。

窪田 最初は、僕らは彼女にくわれていたけど、彼女の部屋で2回目に撮影したあたりから、逆に彼女をくつたと思うんです。

和久 そう。「こうしろ」「ああしろ」って指示するんですよ。もう、ずいぶん言うようになったもんだと……。

でも、私はその時、自分でもずいぶん協力的にやったと思う。

窪田 そう、協力的だった。それはやはり、その撮影の前に、どこかで会ったりといったことがあったせいでしょうね。

中島 でも、ここまで撮ったというのはえらいね。ふつうは途中でカメラを捨て、お話をしましまうとか、このチャンスに、とか思うからね。

窪田 勝手なことをいえば、彼女にくわれているというか、押されぎみだなというのを感じていたから、一度、彼女をめちゃめちゃにしてみたいですね。本当はもっといきたい、という感じがあるんですが、その辺は理性で押さえちゃうんですね。

中島 そこら辺が、君の限界だな(笑)。でも、窪田君の場合、メディアをちゃんと見つめているからな。でも、そこには逆にキレもあるんだな。相手を従わせたいと意識が働いて、映画的になってしまう。その辺がビデオアートの落ち入りやすいところだろうね。

窪田 でも、それはそうやってみなないとわからないし、そこへ落ちこんでまた一步、先へ進めるかもしれない。

## ビデオは教えられるメディアではない!!

中島 このテープを撮ってみて、これがビデオだという感じがしてきたんじゃない? いつも見ているのは、テレビであって、そもそもビデオではないからね。

窪田 ビデオというのは、テレビとはまったく発想を変えてかからないとだめですね。

中島 菊地君の場合、テレビとビデオはどう区別されている?

菊地 だいたい一緒ですね。ドラマチックにしないといけないと……。この作品には最後までかかわらなかつたので、全部見ていないかったのですが、ここまで面白くなるとは思わなかつた。もっと、テレビみたいにドラマ風にしていくのかと思っていた。

中島 そういう既成概念はすてていかないね。今回の、この作品では、最後まで撮っていた人は結局、ふ

たりだった。つまり、彼女に興味を持った人と、持たない人、そして、彼女を通して、ビデオというメディアを発見した人と、発見しなかつた人に分かれたわけです。そこが非常に面白いところだね。耕田君は、今回の経験でパフォーマンスに目覚め、ダンスの学校へ通うようになった。和久さんも、このテープから自分の知らない一面を発見したしね。

この発見するということは、非常に重要なことで、僕は彼らがこの作品を制作している間、いろいろ文句をいってきたけど、発見しなければいけないことには、まったくサジェストしなかつた。それは自分で見つけることだし、そこまで教えてはいないと思うんだな。だから、大学などのように、アカデミックに、または体験的に教えるても、ビデオの場合、

まったく無意味なんだな。僕が学んできたことも、ある人には正しくないかもしれないし……。ある状況から、こういうことを感じたということが大事なんだな。

窪田 あまり教えてくれなかつたしね(笑)。

中島 ビデオはあまり教えられるメディアではないからね。英語のレッスンのように、やった人が強いわけだ。

V.C. このあと、この作品はどうしていくんですか?

窪田 許されれば、彼女を撮り続けていきたいと思いますけど……。写真でもやってみたいですね。

## ◎キナリオ法的撮影テクニック

### 〈原宿での街頭インタビュー、撮影風景より〉



このスタイルで撮影するのもキナリオ法の撮影テクニックだ。撮っているかどうか、わからないようになることが多々

2カメ法による撮影  
(撮影中を後ろから  
再度撮影)



アクティブ撮りの一例。昔のデッキは重たいので、このようにして撮ることをすすめる



ステールカメラとビデオカメラは、いつもセットで持つていれば、立体的に面白い映像づくりができる

アクティブに撮るために、コードさばきが問題になる。コードはこのようにしておけば、パーフェクトだ



### 〈彼女のアパートを訪ねあてた時の撮影風景より〉

2度目に彼女に会った時の  
撮影風景。彼女のアパートの前にて



マイクの使い方も、ビデオ撮りの大切なポイントだ。マイクとカメラの位置はいつも三角形をしていないといけない



インタビューしながらの2カメ撮り

追いかけながらのビデオ撮りはむずかしい。こんな時のマイクは、いつも彼女との距離、1mは保っていないといけない。インタビューしているところも撮られているからだ